

珈琲の思い出三

こんなことを話したこともあった。

いつか二人が一緒になったら、おいしいコーヒーを研究しよう。お気に入りのDVDを観ながら、今日の豆を選んでコーヒーを淹れる。冬の夜は寒いから、ソファで毛布にくるまって温かいコーヒーを飲もう。でもき、きつとDVDなんか観てらんないよ。うん、きつといちゃいちゃしちゃって、結局、DVDは観れませんでした、ってね。

秋になったら、キャンプに行こう。満点の星空の下、二人でコーヒー飲もうよ。少しウイスキーとか入れちゃう？ うん、それから二人くつき合って寝ようよ。

僕が定年になったら、一緒にカフェをやろうよ。海の見える静かな場所です。コーヒーのいい香りが漂って。その頃には、僕もコーヒー淹れるの大分上手になってるはずだよ。「ご主人、大分ましになりましたね」って、お客さんから言われたりしてさ。

嬉しそうに話す和樹の顔を見ながら私は、あと十七年経ったら、和樹の髪の毛はどれくらい白くなっているのだろうか？ 和樹の手にはどれくらい皺が寄っているのだろうか？ 和樹はどれくらいSEXができなくなっているのだろうか？と想像していた。でもたとえ、彼が白髪だらけで、シワシワのおじいさんになったとしても、今と同じように愛しく思うだろう、とも。

でも、そんなことも今となつては夢のまた夢。

和樹は相変わらず紅茶しか淹れない妻の家に住み、そして時折、私の思想の中に姿をあらわしては、私を悩ませる。

コーヒー好きの私は、さりとて、コーヒーを飲むのをやめるわけにもいかず、こうして毎日、コーヒーを淹れるたびに、苦い思い出まじりの吐息を吐きます。

「ああ、いいね…」